

あいさつで広がるあたたかい地域

今年度の瑞穂市「少年の主張大会」で、本田小学校の代表として主張されたものです。この主張にあるように、あいさついっぱい、あたたかい本田をつくりましょうね。(一部、省略しています。)

「何かあったらすぐに言うんやぞ。何かあってからではおそいで。ほんまに。」

すごく心強かった。お母さんが働いているから、ずっと学童にお世話になっていたけど、今年から学童に入れないことが分かった。

祖父母は近くにいない。だから何かあった時にすぐに助けてもらえる人がいない。近所の友達のお母さんも働いているから、周りは子どもだけだ。こわい想像ばかりしてしまって、4月になるのが不安だった。いつもお母さんは、

「近くにおじいさんやおばあさんがいるお家があって本当にありがたい。何かあったときに助けてって言える環境でくらせていることに感謝しないとイケない。」

と言っている。学校から帰るとき、畑で知っているおじいさんとおばあさんを見ると、何だか安心する。知らない人とすれちがうと、ものすごくドキドキするし、こわい。テレビなどでふしん者の報道があるとなんか見てしまうし、自分に置きかえてしまう。もし、変な人がついてきて、家に入るときに後ろにいたらどうしよう。家に帰ってかぎを開けたときに、だれかが家の中にいたらどうしよう、って。大きな声を出したら、だれか助けに来てくれるかな？不安でこわくて家の前にいたら、だれか声をかけてくれるかな？そんな不安な気持ちをなかなか言えず、強がっていた。

家族で4月からどうするか話し合ったとき、お父さんやお母さんの小さいときの話を聞いた。お母さんの住んでいたところは、畑や田んぼがたくさんあって、いつも誰かが外にいたそうだ。そして、学校の帰り道にいつもたくさんの近所の人が、

「おかえり。」

「気を付けて帰らなあかんど。」

って、声をかけてくれていたそうだ。

今みたいにふしん者がいたかもしれないけど、たくさんの人の目があって、知らず知らず子どもを見守ってくれてたよって。だから、おじいちゃんやおばあちゃんがいっしょに住んでいなくても、近所の人に助けてもらえたよって。

小さいときから家の周りを散歩していたのにはわけがあるのだと、お母さんは教えてくれた。散歩していると、近所の人と顔を合わせてあいさつができる。すると、顔や名前を覚えてもらえる。

「近所の人にはたくさんお世話になるけど、何かあれば声をかけ合える関係ってすてきなんだよ。」

って、お母さんは言っていた。そういえば、お母さんのおじいちゃん、おばあちゃんの家に行くと、近所の人が声をかけてくれるな。

近所のおじいさんが声をかけてくれたとき、改めて見守ってもらえているって思えた。そんな地域ですごくしていることに感謝しなくてはいけないうし、「おはようございます。」って、元気な声をかけていきたい。

そして、これからもずっとあたたかい地域であり続けたい。